

早いものである。宮古島市総合博物館は 2009 年 11 月 1 日、創立 20 周年を迎えたという。これを機にこの 20 年を総括して、さらに内容、施設、陣容…ともに充実させ、地域に根ざし地域に支えられた総合博物館として、いっそう発展することを期待するものである。

市町村合併前の旧平良市総合博物館に 4 年 4 ヶ月在職し、退職して早くも 10 数年経たが、今も同館に対してはある種の郷愁めいたものを感じている。博物館勤務を発令されたのは、開館 5 月後の 1990 年 4 月 1 日であった。前日の 3 月 31 日付けで社会教育課長兼任であった初代館長が定年退職した、その後任で 2 代目館長になるが、初の専任館長としての発令である。開館当初の陣容は「総合」とは名ばかり、専任は唯一人(学芸員)、あとは兼任 2 (館長 1、事務主事 1)、臨時職員 4 の計 7 人というまことに厳しいものであった。5 ヶ月めに入ってようやく専任 2 人めとして発令されたわけで、兼任は事務主事 1 人となった。その後少しずつ整備されて、93 年 4 月には、専任 5 人(館長 1、学芸担当 3、庶務 1)、臨時 3 の計 8 人となり、同年 8 月 17 日登録博物館に認定されている。沖縄県立博物館、八重山博物館、浦添美術館、名護博物館につづく県内 5 番めの登録博物館である。

博物館建設に至る、いわば前史のようなことについては、以前に何かに断片的に記したことがあるが、記憶が鮮明のうちに多少の希望をまじえながら今少し明記しておきたい。

1974 (昭和 49) 年という年は旧平良市(ひいては宮古)の文化行政を語る上できわめて画期的な年であったと考えている。72 年 5 月「祖国復帰」したばかりで、27 年にわたる米軍全面占領下の遅れを取り戻そうとするかのように、都市基盤の整備や土地改良など大型公共工事はじめ予算規模は従前とはくらべようもないほど増大していた。それにともない機構も整備、拡大され、職員も増加していった。

文化行政に限ってふれるならば、教育委員会に課制が導入されて指導課が設置され、県から 2 人の指導主事が出向してきた。こうして以後の文化行政は指導課と市長部局の企画室との密接な連携のもとに取り組まれるようになった。前年度に始まった文化財保護行政を軌道に乗せ、市民総合文化祭や市史編さん事業を展開し、少年少女合唱団もこの年に設立された。さらに言えば「宮古まつり」も、関東・関西の「ふるさとまつり」も、この年に始まっている。これらの事業は早くも 30 数年の歴史を重ねていることになる。いくつか民間に受けつがれた部門もあるが、大方は市町村合併後の宮古島市によってしっかり取りくまれている。

文化財保護行政では、条例によって委嘱された文化財保護審議委員(当初 5 人、のち 9 人)は、全市域の悉皆調査の過程で、船便ごとに貴重な文化財が骨董屋等によって宮古(県)外へ持ち出されていることに警鐘を鳴らした。翌 75 年 8 月には早くも「宮古博物館(仮称)」の設立促進並びにその関連措置について(意見書)を教育委員会に提出している。市民会館の一角に「郷土資料室」が開設され、市長部局の同意のもとに市民各層から寄贈(託)された文化財を収蔵し、その後 NHK 宮古放送局跡地を改装して開設された「歴史民俗資料館」へ移管し、さらに「総合博物館」へと発展させられている。

市民総合文化祭は周知のように、書道や美術、写真、園芸などの展示部門と、音楽祭や民話・お話大会、郷土芸能祭、青年の主張大会などの舞台発表部門と、10余種に及んでいる。すべての部門に市民有志による運営委員会が設置されての市民総合文化祭である。展示部門の一つであった「民芸品」部門は、当初の構想通り、歴史民俗資料館→総合博物館へと受けつがれ常設化されている。市史編さん事業のなかで収集、あるいは寄贈（託）された史資料も「市史」に反映されしだい同様の道筋をたどることになる。もっとも市史編さん事業で得た史資料は、いつか市に「文書館法」による公文書館あるいは文書館が設置されたとき、ぼう大な行政文書とともにそこへ移管され、改めて広く市民に公開されることも予想されよう。このように市民総合文化祭ははじめ文化行政の大方はそのつど、あるいは年度区切りの事業であるばかりでなく、その成果は市民の財産として公的に管理・公開されるよう。各審議会等では機会あるごとに論議されている。

博物館に勤務して気になることがいくつかあった。1. 正面玄関を入ると常設展をみることなく直ぐ企画展示室になっている、2. 第一常設展示室の奥の延長線上にデッキに通ずる出入口がある、3. 収蔵庫や資料室に空調設備がない……などである。小規模館なのだから、出来れば企画展示室は奥まった所に設け、往復ともに常設展示室をへて参観することで常設展をそのつどみてもらえる、第一常設展示室の奥デッキへの出入口からは朝日がモロに射し込み展示物を劣化させてしまう、閉め切ればデッキの用をなさない、空調施設のない収蔵庫は湿度も温度も高く、美術品等の収蔵に支障を来してしまう。

建物は1988年4月～11月竣工しており、1年後の開館に向けて89年4月から常設展示作業を始めている。この一連の準備作業に関わってきた職員は皆これらの気がかりな事柄は承知しており、それなりに解決に向けて努力していた。しかし実際に解決したのは空調施設のみでそれも91年4月に入ってからである。常設展示室とデッキとの関連だけはなかなか良い知恵が浮かばない。結局のところ朝日が射し込まないよう常時厚手のカーテンで締め切るのを追認するだけで、参観時の快い疲労をいやしてくれるはずであろう、デッキからの眺望はあきらめるしかなかった……。企画展示室の移動については、三つある収蔵庫のうち比較的大きい収蔵庫を企画展示室に切り換え、企画展示室は特別常設展示室にする、その代り建物背後の階下の広い空間に仮収蔵庫の一つ設置する、このような構想を話題にしてみた。もっとも空調設置のさい、新設したばかりの建物に工事費投入を議会が認めるわけがない、という財政当局の「正論」に一年近くも手こずったことを想起すればとても言い出せる要求ではなかった。

創立20年、施設も少なからず老朽化してきた。それに何よりも宮古の歴史や民俗、祭祀、歌謡等の研究はもはや昔日の比ではない。市民各層はじめ関係者による寄贈（託）品も収蔵庫にあふれるほどである。これらのことは毎年刊行される「紀要」や「年報」によっても理解できよう。博物館そのものの増（新）設も視野に入れて、望ましい企画展示室の位置づけ、常設展示室の模様替え、収蔵庫の増設など検討すべきときにきていよう。そのさい学芸員の養成など博物館に必要適正な人材の養成、配置等についても長期的展望に立って熟慮し、断行してほしいものである。